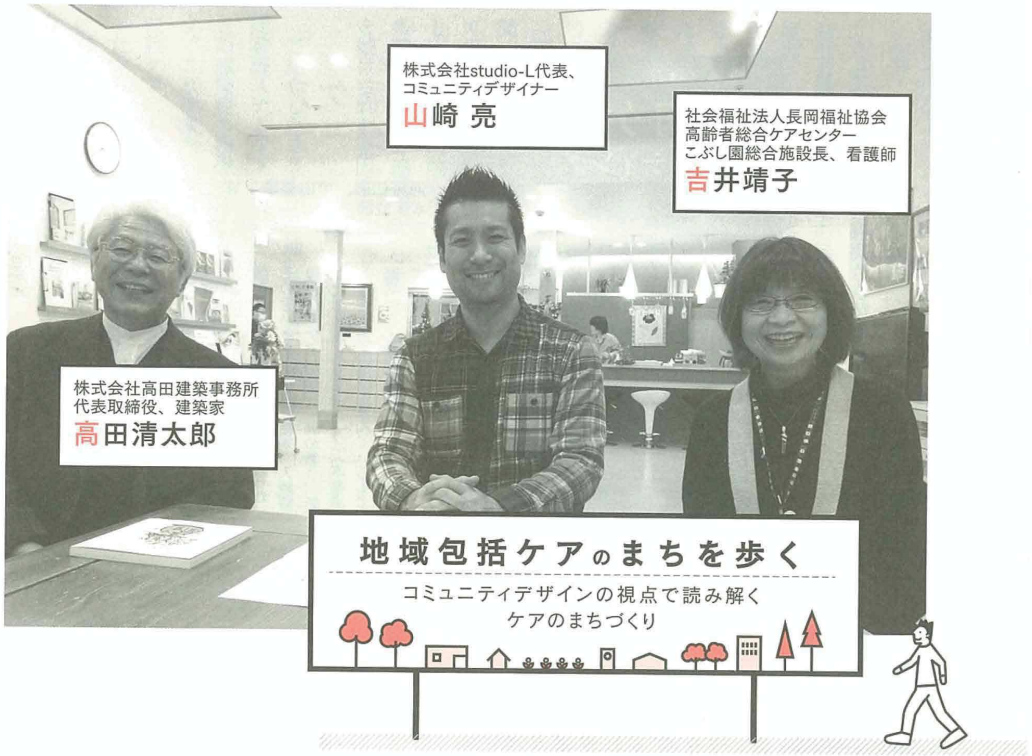

第2回

まちは施設のメタファー

新潟県長岡市・社会福祉法人長岡福祉協会
高齢者総合ケアセンター こぶし園・サポートセンター摂田屋

2007年、48戸の住宅や店舗をつくる計画でスタートした「リブチの森」。そのなかに2010年、「サポートセンター摂田屋」がつくられた。しかし、初めからすべてが順調に進んでいたわけではない。当初、近隣住民に説明すると、「福祉施設はちょっと……」という戸惑いの声が上がった――。

施設じゃない、住宅をつくるんだ

高田 住民が心配していたのは、まず、車の出入りが多くなるんじゃないか。それから、救急車が頻繁に来るんじゃないか、においがするんじゃないか、徘徊する人がいるんじゃないかということでした。そこで、住民に集まってもらって、小山さんに1つひとつ答えてもらいました。

たとえば、「車はありません。車を運転する人、いません」って（笑）。サポートセンター摂田屋には、サテライト特養のほかに在宅支援型住宅が併設されていて10世帯が入っていますが、誰も車を運転しません。ご家族を含む地域の方は、ほとんど皆歩いてきます。

それから救急車。「大丈夫です。救急車は、突然必要になったときに来るのであって、ここでは前もってケアしているので、ほとんど来ません」と。

山崎 普通、想像するのと逆ですよね。

高田 あと、におい。「においがしたら、皆さんの家庭ではどうしますか」「窓を開けます」「ここはスタッフがそれをやりますから、臭くありません」。

山崎 実際にこうして建物のなかに入っても、においはしないですよね。

高田 小山さんは「それが普通ですよ」って言いました。

さらに徘徊する人。「あまり大きな声では言えないけど、徘徊している人、すでに学区内では100人か、200人はいますよ」って（笑）。

そうしたら、それから皆が応援してくれるようになって。その説明会で、仕切り直しができてよかったようです。

山崎 通常は、すでに住民が住んでいるところに、あとから福祉施設をつくるというのはなかなか成立しないものですよね。

高田 それが、ここではすんなりといきました。最初から「施設じゃない、住宅をつくるんだ」「地域に帰したいんだ」と説明したんです。「知らない人じゃない。あなたのお父さん・お母さん、おじいちゃん・おばあちゃんが戻ってくるんだよ。何も特別なことではないんだ」と。それを示している特徴の1つとして、施設名の看板がないということが挙げられますね。

吉井 そうそう。各居室の表札はあっても、看板は一切つけていないんです。利用者さんの家族からは、看板があると行きやすいという声はあったんですけど、「あなたのおうちに看板がありますか？」と、お断りしました。家には表札はあっても、看板はないでしょう。

高田 タクシーの運転手には何度も「住宅だと思って、迷っちゃった」と言われています。思惑どおりです（笑）。

山崎 ほかのサポートセンターも看板はつけない？

吉井 つけません。市内にたった1か所だけ、こぶし園の事業全体を看板にしたものがあるのみです。

山崎 なるほど、そのスタイルがフィットしたわけですね。今は、ご近所の方々はどう受け止めているんですか。

高田 とくに問題はありません。夏には冷房も効いているし、冬は暖かいので、子どもたちがここに来て遊んだり、高齢者とお話をしていたりしますよ。

山崎 この住宅地は、あと20年も経つと一等地になりますね。サポートセンターのお隣さんでしょう。何かあったときには、すぐ来てくれる。距離なく、まるで施設のように、365日・24時間ケアをしてくれるまちです。住民の方々も、20年くらい経ったときにそれを実感すると思うんです。普通、35～40歳くらいで20～30年のローンを組んで家を買いますけ

1341-7045/16/¥500/論文/JCOPY

ど、自分が50〜60歳になったときに、あらためてここに住んでいてよかったなと思う機能があるんですから。

吉井　まちが施設だとしたら、サポートセンターが看護師や介護職がいるステーションで、道路が廊下で、それぞれの家が居室なんです。どのサポートセンターもこのかたちです。これは、地域包括ケアシステムの1つのかたちになっていくと思うのです。

山崎　それは素晴らしいなぁ。

高田　こぶし園の長い歴史のなかで培われたものですね。

山崎　逆に、まちぐるみでやるときに難しいことって何かありますか。費用面など、施設のほうが効率がよい面もあるんじゃないでしょうか。

吉井　費用面の効率は悪化しています（笑）。これからはたぶん、マンパワーが課題ですね。それを打開するためには、1地域を1法人でみる、地域包括報酬制度のようなものが必要になると思います。法人を決めるときは、指定管理者と同じようにプロポーザル方式で、審査には必ず利用者・家族の目も入れて、よくなかったら別法人に変えればいい。

今は、複数法人があるからそれぞれに配置基準を守った人員が必要ですし、法人ごとにバラバラに同じ地域をみているので無駄があるんです。

高田　そうなったら、国にとってもいいですね。

吉井　今、「連携から統合へ」といわれるようになっています。**地域包括ケアシステムをつくるなら、統合せざるを得ない。**今、話した案が実現したなら、究極の統合だと思う。

山崎　これまでも連携してきたし、いいところもあるんでしょうけど、連携にも無駄はありますものね。

普通の暮らしに近づけたいという思いがあった

高田　設計するとき、毎回、小山さんに言われたんですよ。**「施設つくるのか、家つくるのか」**って。

吉井　「家」をつくりたいんです。2006年に行なわれた介護保険制度の改正で、介護が大規模集約型から地域生活支援に方向転換され、施設での食費と居住費が原則的に自己負担になったという大きな変更がありました。アパートで家賃を払うのも、施設に入って部屋代を払うのも、同じことになったんです。家賃を払うのであれば、いい環境に越したことはない。4人部屋よりも個室がいいだろうし、地域から離れた郊外ではなくて、自宅により近いところがいい。そうやって質を向上させていかなければダメだと考えました。

旧こぶし園では1人の生活空間は8・4㎡くらいでしたが、サポートセンターはすべて個室なので、16〜19㎡とかなり広くなっています。居室にベッドとエアコン、トイレはついていますが、そのほかは自分たちの家具を持ってきてもらったりして、特養の居室と思えない、まるで自宅のようなしつらえになっているお部屋もあります。

日本の特養の4人部屋は、病院モデルでつくられていました。だから面会に来ても、中腰で話してそそくさと帰るようなかたちで、ゆっくりともに過ごせる空間ではなかった。それを個室化して、これまで使っていた自分の椅子や食卓を置いてもらうことにより、「その人の部屋」になる。家族が来たら一緒に食事をすることだってできる。おじいちゃんやおばあちゃんのお部屋が、家の外のちょっと遠いところにあるという感覚なんです。

もちろん、面会の時間やタイミングも自由。これまでの特養では家族が面会に来るとまず事務所があり、そこで利用者との間柄や目的などを面会簿みたいなものに書いたでしょう。でも私たちは普通の暮らしに近づけたいという思いがまずあったので、面会簿をなくしました。だって、アパートやマンションで、管理人に目的や行き先を言う人はいないでしょう。事務所もとても小さな部屋にして、ホテルのフロントのようにしています。

サポートセンター摂田屋では、居室1部屋ごとに玄関と表札をつけました（**写真・表**）。重度の方はこちらで鍵を管理しますが、基本的には入所するときに「もしよろしければ」と言って鍵をご家族に預け、職員にいちいち断らなくても自由に入ってもらうようにしています。看板をなくしたように、外見的にも、極力「施設っぽさ」を消すようにしています。

表◉「サポートセンター摂田屋」の機能

- 地域密着型介護老人福祉施設
- 認知症対応型共同生活介護
- 小規模多機能型居宅介護
- 配食サービス（3食365日型）
- 地域交流スペース
- カフェテラス／キッズルーム
- 在宅支援型住居

住宅地に溶け込む外装。居室1部屋ごとに、赤いポスト、家族が直接出入りできる玄関がある。

徹底的に利用者の目線で

山崎　高田さんから見て、こういったこぶし園の取り組みはどうですか。ハード面だけではなく、こういうしくみそのもの……施設の廊下がまちの道路で、ナースコールはタブレットで代えられるというような。建築業界では、よくメタファー[*1]という言い方をしますけど、まさに、**まちが施設のメタファーとなっている。**

高田　その通りですね。また、同時にフラクタル[*2]といってよいかもしれません。今となっては、自分にとっても当たり前なんですよね。

ただ、こぶし園の考え方で私がいちばん共感したのは、**「人間の居場所って何なんだろうか」**ということを、計画者じゃなくて、生活者の目線で考えるということでした。すごく目線が低いところに置かれているんです。これって、普通はとてもコストがかかると思いますよね。

山崎　確かに。

高田　上から目線でやれば、そんなにコストがかからないところを、生活者目線

註1　メタファー
隠喩。あるもの（A）を表現するときに、そのもの（A）の特徴を暗示する別の言葉（B）や物（C）を用いる手法。「時は金なり」など。近年では表現手法のみならず、人間の認知において、「ある事柄をほかの事柄を通して理解し、経験すること」を指すこともある。

註2　フラクタル
もとは幾何学の概念で、部分が全体に相似（自己相似）していること。

で本当にきめ細かく考える。小山さんは、「普通だよ」と言っていましたけど。

吉井　小山はそう言いますね。私たちは、特別なことをしたいわけではなくて、普通のことを普通にやりたいんだ、と。やっぱり、利用者の立場に立っていたいんです。自分が使うなら、と考える。

山崎　施設管理者ではなくて、利用者の視点から考えていこうとされたんですね。だから、高田さんと小山さんは意気投合して、いろいろやれたのかもしれないですね。

高田　小山さんは、「もっと広く、もっと安くつくれ」と口癖のように言っていました。これもやはり、利用者のために。高い施設はいくらでもあるけど、本当にやりたいのは、いちばん困っている人たちが入れる場所をつくることだ。ホテルコスト[註3]は3万円台にしなさい、と。設計者としては、そのたびに悩みましたが。

吉井　建築コストは自己負担分の部屋代として利用料に跳ね返ってしまいますからね。そこは譲れないんです。

山崎　それは、正しいですよ。建築家というのは、コストをちょっとずつちょっとずつ、無意識のうちに上げていっちゃうんですよね。いい空間をつくろうと思うと、総工費が上がってしまう。設計料は総工費の1割程度ですから、総工費が上がれば建築家の収入もあがる。そこの利害が一致しちゃうと、妙な建築が生まれてしまう。

でも、こういうことはよほど良識的な建築家じゃないと言えないですよね。だから小山さんみたいな人がいて、「できるだけ安くやってくれ」と建築家が無理だと思うくらいのことを言ってくれると、こちらもいいアイディアが出てくるんです。

まちをメタファーにしてできること

山崎　ここまで施設にフォーカスして話を進めてきましたけれど、こぶし園は、施設から外へ出ていくことにも重点を置いていますよね。いわゆる普通のまちのなかにある家に365日・24時間訪問ができるしくみです。僕たちのプロジェクトでも、わりと似た考え方をもってやることが多いんです。

たとえば、長崎の五島列島に半泊（はんどまり）という小さな集落があります。五島列島の福江島のなかでも比較的不便な場所にある集落です。もともと隠れキリシタンの里だった場所で、現在ではいわゆる限界集落になってしまっていた。昔は20世帯くらい住んでいたようですけど、この50年間でどんどん人口が減少し、今では5世帯9人しかいないんです。

もともとの住民が4世帯と、最近移り住んできた住民が1世帯。もともとの住民は皆70代以上で、隠れキリシタンの人、カトリックの人などさまざまで、微妙に仲がよくないんですよ。協力して何かをやろうという雰囲気にならないらしくて。

新しい1世帯は50代の夫婦で、五島列島出身の奥さんと東京出身のご主人。集落にあった小学校の分校が廃校になって、その跡地に住みながら集落を元気にする人を長崎県五島市が募集したときに入ってきた方々です。

その夫婦は校舎のなかをリノベーションして、自分たちが住む場所にしつつ、集落の人たちに、ここに集まって何かやってもらおうと考えた。ところが、その4世帯に一生懸命話しても、なかなか来てくれないんです。仲がよくないからね。それで困っちゃって自治体に相談したことがきっかけになって、studio-Lが協力することになりました。

その夫婦が取り組んでいたのは、分校跡地を使って観光客を呼び、自然体験などをしてもらうことでした。周辺の山や畑は、元の住民だけでは手入れができなくなって荒れてきていた。それで彼らが思いついたのは、半泊にはきれいな港も水も山もあるんだからと、都会からエコツアーのようなかたちで10人単位で旅行者を受け入れ、1週間泊まって環境学習してもらう「半泊ステイ」でした。

夫婦が住んでいるのは分校の一部だけなので、ほかの教室に泊まれるようにしたらけっこう人気が出たんですけど、ベッドが5つくらいしかなくて。それで、僕たちが入ったときに、元の住民のうちの1人が「うちには空いている部屋がたくさんある。トイレや風呂、食事を廃校で済ませてくれれば、寝るだけならうちに来ていい」と言ったんです。つまり、**集落の道路を「旅館の廊下」、その人の家を「客室」としていい**と。そうしたらほかの3世帯も、「じゃあ、うちも部屋を貸してやるよ」と言って、今、皆の家の空き部屋が旅館の客室となって、食事や入浴といった旅館の中核機能だけは分校跡地というスタイルでやっています。

高田　観光が盛んになればホテルが不足するからと……「民泊」の前身ですね。

山崎　これがこぶし園とすごく似ていると思いました。**大きなホテルとか旅館を建てるのではなくて、そのなかの必要な機能だけを小さくして、あとは「まち」でいいじゃないか**、という考え方。旅館じゃなくて、高齢者施設でもそれができるんだというのは、目からウロコでした。

ほかに僕の知り合いでも、同じように「まちぐるみ旅館」というものを香川県高松市でやっている人がいます。「みかんぐみ」[註4]という建築設計事務所にいた建築家が高松の実家に戻ったら、親御さんが温泉の出そうな土地を買うという。掘ってみたら本当に出たので、彼の処女作は温泉。仏生山温泉といって、みかんぐみ風でちょっとオシャレなんです。

彼の本業は設計事務所ですが、温泉でもスタッフが働いていて、仏生山にいっぱいある空き家を1戸ずつリノベーションして、客室にしていって、これを道路でつなぐということを始めています。お風呂は温泉がある。食堂はまちのなかにいっぱいある。仏生山のまちをまちぐるみで旅館にしましょうというプロジェクトです。

吉井　地域が旅館なんですね。箱物じゃなくて。

山崎　そこには、今は30代が多いんだけど、自分たちが40年後も、50年後も住めるまちにしたいという考えがあるんです。高齢になったときにもパンを食べたいから、いまあるパン屋さんに自分の好きなパンをつくってもらうとか、年をとっても男性が1人で行けるカフェがほしいけど、高齢男性が1人では入りづらい、本や新聞があればそれを言い訳に入れるというので、今あるカフェに本や新聞を置いてもらったりとか……。

そう言っているのが、その建築家で、彼は今、42歳。だけど、30〜40年後にはその土地に住む高齢者になっていくので、たぶん「まちぐるみ旅館」は、そのうち、まちぐるみでこぶし園みたいになっていくんじゃないか、と。

吉井　小山は「自分が使うときにどう思うか」と、人のためでなく自分のためにと言っていましたから、同じですね。

次回へつづく…

註3　**ホテルコスト**
居住費（家賃・光熱費）と食費。

註4　**みかんぐみ**
神奈川県横浜市の建築設計事務所。代表作は、愛・地球博トヨタグループ館（愛知県）、マルヤガーデンズ（鹿児島県）改修、マーチエキュート神田万世橋（東京都）など。